

落ちぶれた浪人が、
助けた河童と（賞金つき
の）山賊を倒す

ねじまき侍

脚本 大岡俊彦
原案 ほら

登場人物

次郎丸(34) : かつては強い侍だったが、
今はやる気のない浪人。

河童(10?) : 次郎丸が会おう宇宙人の子
供。

先手組ボス(40) : 悪名高き山賊のボス。

山賊1 : 先手組。以下おなじ。

山賊2

山賊3 (堀部安衛門) : 元侍の山賊。

山賊4

山賊5

中盆
ツボ振り

父河童(30?) : 子河童の父。

○江戸の空、夕暮れ

宵の明星の出るころに、流れ星が一筋。

○町はずれ、賭場、内

中盆 「さあ！ はったはったはったはったあ！」

ツボ振り 「どちらも！ どちらも！」

丁半博打の賭場は、今夜もにぎやかだ。

路銀を数枚、丁に賭ける浪人、次郎丸（34）。着物はぼろぼろ、月代も中途

半端なダメな外見。

徳利片手に酩酊中だ。

中盆 「おっとやるねえダンナ！」

次郎丸 「全部だ。全部だ。これでもう全財産だ」

ツボ振り 「入りましょう！ ……二、五の、半！」

次郎丸 「………」

次郎丸の全財産はもっていかれる。

次郎丸 「待て待て待て！ 財産なら、まだある！」

次郎丸、身なりにしては立派な、腰の大小を出す。（刀は賭場で御法度かものので、預けた所から持ってくるかも）

次郎丸 「…（ちよつと考えて）否、落ちぶれたとはいえ、武士の魂までは渡せん！」

○同、外、夜

刀を差しながら、とぼとぼと出てくる次郎丸。立ち止まり、踵を返そうと。

次郎丸 「やっぱ、もうひと勝負…と、空に流れ星。

見る間に大きくなり、轟音が響く。

そのアップ。よく見ると宇宙船。

次郎丸 「流れ星？ ……」

山の奥へドオオオオオオという音とともに消える。

次郎丸「金になる話、か…？」
次郎丸、その方角へ走り出す。

○山道、夜

藪の中からへんな声が。

声「むきゆう。むきゆう」

次郎丸「ん？」

声「助けてくれ。むきゆう」

次郎丸「むきゆう？」

藪の中には、畏に捕まって足から緑の血を流す、河童（10）が。

次郎丸「か、河童？」

河童「むきゆう。弱った。頼む。助けてくれ」

よく見ると河童ではないことは、観客には分る。SF的な緑色の装備が、侍には河童に見えているのだ。

× × ×

銀色の布で、緑色の血に包帯する河童。

河童「助かった。かたじけない」

次郎丸「お主、本当に河童か？」

河童「俺は宇宙人だ。俺の本来の居場所は、あそこだ」

と、夜空の星をさす。

次郎丸「天？」

河童「先ほど、巨大な流れ星がきたろう」

次郎丸「そうだ、俺はそれを…」

河童「あれは、俺の父がさがしに来たのだ」

次郎丸「お主、…はぐれたのか」

河童、立とうとするのだが、足が痛む。

河童「すまんが、連れてってもらえるか」と、馬に乗った一団、先手組たちが、街道を山の方へ駆けてゆく。

次郎丸「伏せろ！」

河童とともに伏せる。

河童「…何だ？」

次郎丸「山賊先手組。札付きのワルだ」

インサート。「お尋ね者」の人相書き。

次郎丸「まさか奴らも流れ星でひと稼ぎを…」

次郎丸、河童を背負い、街道とは違う
山道へ。

河童 「どこへいく？」

次郎丸 「この道は先回り出来る。馬には行けない道だ。お主には居場所があるのだから？ お前は父に会う、俺は山賊退治。奴らの首をお城に持ってゆけば、仕官の道も叶うかも知れん」

河童 「助かる。むきゅう」

次郎丸 「その、むきゅうというのは何だ」

河童 「？ 鳴き声だ」

次郎丸 「：そうか」

○溪流沿い、夜

河童を背負って道を急ぐ次郎丸。

河童の手についている腕時計に気づく。
次郎丸 「変わった腕輪だな。生き物が中に入っているのか」

河童 「生き物ではない。これは機械だ。お前らのいう、からくりじゃ」

次郎丸 「バカな。こんな小さなからくりがあるか」

河童 「見せてやるよ」
座った二人。

河童は、腕時計の蓋を開けて、精巧なバネや歯車を見せる。

次郎丸 「なんじゃこりやああ。まるで生き物ではないか！」

河童 「ちがうよ。ひとつひとつが部品だ。その組み合わせで動くんだ」

次郎丸 「もつとよく見せてくれ」
と覗こうとした所へ、山賊1、2、3
がやってくる。

山賊1 「ここいらは先手組の縄張りって知ってるよな？」

山賊2 「なんだコイツ？ 河童か？」
山賊三人、抜刀。

次郎丸 「悪いが、先を急ぐのでな」
立ち上がり、刀を抜こうとする。

次郎丸「？」

抜こうにも、抜けない。

山賊1「どうした？ 臆したか！」

襲いかかる山賊1、2、3。

次郎丸、鞘ごと刀を振るい、山賊1を一発で殴り倒す。

再び、刀を抜こうとするが抜けない。

次郎丸「畜生！ 錆で抜けぬほど…俺の魂も錆びついたか！」

襲いかかる山賊2を、また鞘で殴り倒す。

残る山賊3は、刀を正眼に構える。

間合いを取る次郎丸。

次郎丸「お主、元侍か」

山賊3「何故分る？」

次郎丸「それは、正式に剣を鍛錬した者の構えだ。…食い詰めて、山賊となったか」

山賊3「やかましいッ」

次郎丸「まあ、博打うちになるのと、どっちがましかと言えば…」

山賊3、きりかかる。

胴払いで一閃する次郎丸。

× × ×

木にしばられた山賊たち。

山賊の刀を、河童が拾い集め、刀身を観察している。

次郎丸「刀に興味があるのか？」

河童「いい鉄だ」

次郎丸「そりゃそうだろ。長船だそれ。盗品だろうが」

河童「俺らの星は、いい鉄が不足してるんだ。だからこの星に、いい鉄の秘訣を探しに来たのだ」

次郎丸「(自分の刀を出し) ならばこの業物、伝家の南部鉄…」

河童「錆びたやつなんていらんよ」

次郎丸「養生意気な！ …そうだ、その腕輪、

父の所まで無事届けたら俺に出来ないか？」

河童「なぜ？」

次郎丸「人の力でそれがつくれる、というのが信じられん。くわしく見てみたい。(山のほうを見て)今は急がねばならん」
河童「うん。いいよ」

○山道、峠、夜

河童を背負い、急ぐ次郎丸。

次郎丸「思い出した」

河童「？」

次郎丸「堀部安衛門。さっきの男の名」

河童「友達？」

次郎丸「いや？」

河童「？ ……何を考えてる？」

次郎丸「もう、平和な時代になった。人斬りの技術を、侍たちは持てあましている。使
い道がないから、堀部殿は山賊になったの
かと」

河童「でもアンタ、まだ人を斬ってないじ
ゃん」

次郎丸「…む。むきゆう」

× × ×

峠から見下ろす。

銀色の巨大な宇宙船が着陸している。

崖ぎりぎりまで身を乗り出した次郎丸。

次郎丸「あれか！ 父上の船というのは！」

と振り返ると、河童はいない。

次郎丸「あつ！」

山賊たちに抱えられた河童。

河童「むきゆう！ むきゆう！ むきゆう！
う！」

馬に乗る山賊たち。走り去る。
次郎丸「…」

○山中、宇宙船着陸地点、夜

かがり火が焚かれ、巨大宇宙船の周囲
を、先手組たち約30名が囲んでいる。

縛られた河童と、その父河童(30)。

山賊4「オラア！ ヘンな声で鳴いてんじや

ねえよ！」

と、父河童に蹴りを入れる。

ボス（40）「オイオイオイ。見世物小屋に売れなくなるだろうが」

山賊4「へい。すいません」

ボス、つかつかと父河童の背後にまわり、首の後ろに焚き木の火を押し付ける。

父河童「むきゆううううううううううう」

ボス「（山賊4に）傷は、背中につけるものだろうが。（父河童に）さっさとあの船の動かし方教えろ。さもなけりや、あの船溶かして大仏にでもしちまうぞ」

河童、藪に次郎丸がひそんでいるのに気づく。

河童、首を振る。「にげる」の意味でアゴで指示。

父河童に飽きたのか、ボスは今度は河童のほうへ。

ボス「子供を拷問すれば、親父は大抵吐くもんだよな？」

手に取った燃える焚き木を……

藪の中から、次郎丸が出てくる。

河童「来るなって言っただろ！」

ボス「ん？　：なんだオメエは？」

次郎丸「：通りすがりの浪人者。賞金首の先手組とお見受けしたが、相違ないか？」

次郎丸を囲む先手組たち。剣を抜刀。

次郎丸「（周囲の構えを見て）堀部殿ほど剣の立つ者は、誰もおらぬか」

山賊5「野郎！」

と斬りかかったのを合図に、大乱闘がはじまる。

次郎丸は鞘ごと闘う闘い方で、手下どもを、ことごとく殴り倒す。

河童「すげえや！」

ボス「やるじゃねえか、侍」

二刀を抜くボス。

次郎丸「侍ではない。主がおらぬ。これは単なる助太刀」

河童 「誰も斬ってねえしな！」
次郎丸 「そういえばそうだな（笑う）。…あ。
斬らない闘い方も、あるのか」

ボス、襲いかかる。

脇差の鞘も使い、二刀を受ける次郎丸。
次郎丸 「河童！ お前には居場所があるんだ
な！」

河童 「お、おう」

次郎丸 「そこへ帰してやる！」

と、伝家の宝刀がはじめて抜ける。

次郎丸 「うむ！？」

河童 「ほほう。いい鉄だ」

ボスの太刀をかわし、一刀のもと斬り
伏せる次郎丸。

○同、夜明け

かがり火は既に消えている。

山賊たちは縛られている。

父河童、河童、彼らの日本刀を大量に
抱える。

河童、腕時計を次郎丸に。

次郎丸 「たしかにもらった。詳しく調べたい」

次郎丸、腰の大小を河童へ差し出す。

河童 「え」

次郎丸 「人斬りの道具は、もう使わん。これ
からの居場所は、太平の世の城勤めじゃ」

河童 「ありがとう。研究させてもらう」

次郎丸 「…」

河童 「…」

次郎丸 「次郎丸。平賀次郎丸がわしの名だ」

河童 「あ。まだ名乗ってなかったね。○○○

×△×△（不思議な発音）

次郎丸 「エレ…（真似しようとする）」

河童 「○○×△×△」

次郎丸 「エレ、キテル？」

河童 「うん。大体、そんな感じ」

× × ×

出発する宇宙船。

次郎丸 「達者でな！」

空の彼方へ、流れ星となって消えてゆく宇宙船。見守る次郎丸。

○後日、お城

袴を着て、月代もきちんと剃り、城に出勤する次郎丸。

その左腕には、河童の腕時計。

NA 「左手にからくりをつけ、腰の刀は竹光という、ヘンテコな侍がいたという記録がある。剣も振らず、毎日毎日ねじまきを研究したので、『ねじまき侍』と呼ばれたそう。有名な発明家、平賀源内の、三代前のご先祖のお話」

空をあおぐ次郎丸。

口をとがらせて、

次郎丸 「むきゆう」

○タイトル 「ねじまき侍」

○エンドロール